発行者 FDワーキンググループ

第13号 Faculty Development

広報FDだより 2009年11月20日発行

ＦＤへの期待

学長 佐 藤 一 彦

教官懇談会からＦＤへの歩み

本学のＦＤの源流は平成３年度から始まった「教官懇談会」にたどり着きます。前年に学部と大学院博士前期課程が６学科６専攻に改組再編され，博士後期課程に３専攻が新設されたこともあって，学内には大きな改革を成し遂げた余韻がまだ残っておりました。しかし今から振り返りますと，この改革と前後して日本は「失われた10年」と言われる経済の失速と社会の変容が始まり，高校生や大学生の意識にも影を落とすようになりました。本学の学生もその例外ではなく，さらに学科編成が50人規模から100人規模に変わったこともあって，教育方法や教育施設の改善が切実な課題として浮上してきました。

こうした状況をうけて，当時学生部長であった故・泉清人先生は教務委員会（現在の教育システム委員会）の中に教育方法改善等検討委員会を設け，「教官懇談会」を発足させました。年２回ほどの開催ですが，毎回50名前後の教員が教育改革や大学改革，授業改善や授業評価などの講演に耳を傾け，講演後には熱心な質疑応答，討論が重ねられました。ちなみに初年度の講演題目は「多人数講義の現状と問題点をめぐって」（第１回），「現代学生気質と大学教育の課題」（第２回）でした。

この懇談会はその後の中断することなく，現在の「ＦＤ講演会」につながっております。学内外あるいは海外から講師を招き，優れた実績のある事例や，時代を切り開く理念や構想に接する機会は，今後も教職員の研修の場として継続すべきと思います。

授業方法改善からプログラム開発とその発信へ

「ＦＤ講演会」と並んでＦＤワーキンググループが育ててきたのが「教育ワークショップ」です。法人化への移行とともに始まったこの企画も，新旧そして学科間を超えた教員が協働で授業方法の改善の方策を探る夏休み中の定番となりました。日程がタイトなことから「疲れた」という声も漏れてきますが，「広報ＦＤだより」に再現されたワークショップは教育方法改善のデータベースに貴重な know－how を年々蓄積していることがうかがわれます。１回の参加者が20名程度ですので，全教員が一巡するのにあと５年ほどかかりそうな点が気になります。開催方法やこれまで蓄積されたデータの利用方法に工夫の余地がないか，みなさんと考えてみたいところです。

つぎにＦＤ活動として明確に位置付けたいのが，新規の授業科目あるいは教育プログラムの開発です。本学ではこれまで「技術者倫理」や「ＰＢＬ科目」といった上級学年の科目，あるいは「フレッシュマンセミナー」や「インターサイエンス」といった導入科目など，特色のある授業科目あるいはプログラムが創案されました。今後も学士課程ならびに大学院博士課程での教育プログラム改善の過程で生まれる授業科目や実施方法を本学の重要なＦＤ活動として位置づけ，それらの成果を出版物，印刷物，Webサイトへの公開などを通じて，学内外に発信していくことが望まれます。学長裁量経費を活用させていただきたいと考えております。

以上，ＦＤへの期待の一端を述べさせていただきました。本学におけるＦＤのビッグ・ピクチャーについてはまた機会を改めてお話させていただきます。

MURORAN INSTITUTE OF TECHNOLOGY

第6回　洞爺湖ＦＤワークショップ2009
テーマ「学生の本気をどう引き出すか」

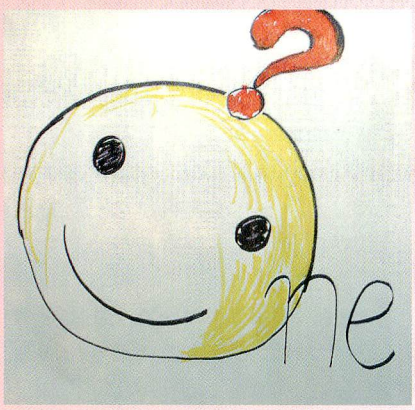
平成21年９月29，30日，洞爺パークホテルで受講生23名，学術担当理事，スタッフ６名，教務課２名の32名でワークショップが実施されました。今年のテーマには，学生に，単位を取ることだけを目的に授業を受けているような受け身の態度から，本気を出して自主性をもって学習をしてもらいたいという思いが込められて入れています。

４つのグループ（One，H2－SINK，六道爆発！，落ち込みHEUREIKA）のそれぞれが，ＷＳ１「学生は大学に何を求めているか」で現状分析をし，それの類型化を行い，ＷＳ２「学生の本気を引き出す工夫」で教員，大学は何ができるかを議論しました。そして大きく２つの特徴が共通しました。１つは，学生は利己的，付き合い下手であるのに自分を認めてもらいたい，人目を気にすることです。これは成績至上主義にもつながり，形式的な成績さえ求めようとします。第２点は消極的，孤立型，ネガティブと分類されるもので，学生自身は何を求めているのか，何が不足しているかさえ明確でない。様々なものへの関心，好奇心が不足しているという問題点があげられました。これらに対して，さまざまなアイデアが出されましたが，とくに学生を刺激し，グループでものごとに取り組ませ社会性を持たせたいという対応案が出されました。こうして毎年のことですが，密度の高い議論，プレゼンテーションの１日が終わりました。

２日目は，昨今話題にのぼる学士力と，室蘭工大生に求めたい能力との関連性について整理をしました。とくに学生に求めるものとして，総合力，問題解決能力，論理的思考能力，コミュニケーション能力がとくにあげられました。最後のＷＳ４「自主講座『大学での歩き方』をつくる」では，各グループの個性が生かされた講座が紹介され，学生に自主性を持たせ多様な世界に触れさせる試みが見られました。

ＦＤワークショップは第６回となれば，前年度と変わりないように思われますが，今年は参加者に東京都市大学から３名もの参加と女性教員，外国人教員の参加，ＦＤ委員長も受講生になるなど多彩なものとなりました。

ロゴマーク賞：One，ワークショップ賞：落ち込みHEUREIKA



受講者：新　大軌，石渡　通徳，河合　秀樹，岸本　弘立，クラウゼ＝小野・マルギット，佐々木　真，鈴木　幸司，関　千草，高橋　英章，田村　亨，土屋　勉，成田　幸仁，ハグリー・エリック・トーマス，畑中　雅彦，吹場　活佳，堀口　順弘，本藤　克啓，三浦　淳，宮永　滋己，森田　英章，（東京都市大学）岩﨑　敬道，岡田　往子，中村　正人

理事：松山　春男（学術担当）

ＦＤＷＧ：河合　秀樹，大鎌　広，奥野　恒久，クラウゼ＝小野・マルギット，澤口　直哉，須藤　秀紹，中津川　誠，安居　光国

教務課：加納　二郎，藤野　祐一

刺激になった異なる学科，年代間での協同作業

寄稿

東京都市大学　岩　﨑　敬　道

室蘭工業大学と東京都市大学とが連携事業を行っていることの一環として，今回貴学のＦＤ活動の一つであるＷＳに参加させていただきました。

事前にお聞きしていたとはいえ，ＷＳであるから参加者の協同作業が欠かせません。接点の少ない同じ学内のメンバーとでさえ，何かを作り出すことに多少の抵抗感があります。まして見知らぬ方々とその場でグループを組み共通項を見出し，ＦＤに関わる成果をあげられるのだろうか。一抹の不安を抱えつつ，夕刻の授業を終え，飛行機に飛び乗りました。

翌朝，８時半に室蘭工大の正門前に到着。バスに乗るなり開会セレモニーに自己紹介。本学からは工学部原子力安全工学科の岡田往子准教授，知識工学部リテラシー自然系に所属する中村正人講師と私が参加させていただきました。

宿舎に着き，早速会場設営。ご担当の方はもちろん，他の方々もてきぱき協力的に作業を行っていらっしゃいました。セッティングも早々に，全体説明を含めたミニ講座があり，予めグループ分けされたメンバーごとにグループ名とロゴの作成です。

以降，閉会行事まで息つく暇もないスケジュールにも拘らず，皆さん楽しげにこなしていらっしゃいました。所属学科等が異なる参加者ですが，常日頃室蘭工大の同じ学生を相手にしているだけに，全体テーマ「学生の本気をどう引き出すか」が共通の問題意識となり，議論が活発に行われました。参加当初は不安ばかりでしたが，テーマに本学の学生との共通部分を見出すことができました。皆さんの温かいお声かけもあり，緊張も解け，以降楽しく参加させていただきました。

本学ではＦＤの具体的活動は始まったばかりです。学科ごとに設定した目標に従い作成したカリキュラムをより良いものにすべく，ＰＤＣＡサイクルの定常化を図る方向で現在取り組み始めています。既にＦＤに関する研究を積み上げつつ，実践を進めておいでの貴学の活動から学ばせて頂く第一歩として，今回のＷＳに参加させていただきました。やはり拝読した「ＦＤだより」では見えてこない企画・運営と参加者の方々の姿勢を肌で感じ，多くのものを戴きました。とりわけ，協同作業を行うことで自学科に留まらない人の交流と，これからＦＤ活動を担っていく人材の育成を図っていらっしゃることに，これまでの積み上げによる成果が現れていることが拝察致しました。

今回はＷＳにお邪魔させていただきましたが，今後貴学のＦＤ活動の全体にわたり学ばせていただきたいと存じます。この度はどうも有り難うございました。

平成21年度日工教教育力向上セミナーに参加して

機械システム工学科　河　合　秀　樹

平成21年８月28日（金）～30日（日）に開催された「日工教教育力向上セミナー」に参加しました。本セミナーは，教育士（工学・技術）受審希望者，並びに教育力向上を目指す者を対象とするも，教育士については浸透しているとは言い難く，私を含め参加者12名のほとんどは教育力向上を意図する人達でした。参加者の構成は大学教員が６名，高専５名，企業１名で，大学関係者には教育組織の運営上必要に迫られて参加した人が大半であるのに対して，高専では教員の教育力向上を真剣に考えておられる先生が多いのが印象的でした。プログラムは講演とグループ作業（各グループ６名）に分けられ，講演に関しては，「教育概論－高等教育の質保証－」，「ＩＣＴ技術の使いこなし方」，「科学技術コミュニケーション教育の実践」，「理工系学生と教員の心のケア」，「エンジニアリング・デザインの重要性」，など，興味深い内容が提供されました。特に，「理工系学生と教員の心のケア」では経験豊かな講師が教員の心のケアまで解説され，その後セットで実施されたグループによる体験学習（ロールプレイ法）では，教員自身も気づかなかった自らの内面を短時間で浮き彫りにさせるなど，面白い手法を紹介して頂きました。

様々な角度から興味深い講演をして頂きましたが，現実の問題点（少子高齢化，学生の工学離れや多様化）に即応しなければならない教育現場はどこも大変で，これを打破する特効薬などなく一筋縄には行かないことに変わりはありませんでした。しかし，同じ問題を有する教員が全国から集い，すぐに溶け合って本音で語られる機会は大きな魅力であり，また企業経験者や他のジャンルの講師を交えて，我々が直面する出来事や問題点を異なった角度から整理できたことも大きかったと思います。特に講演では，「競争と憧れ，そして多様性を認める社会構造が重要」との前芝浦工業大学理事長先生のお話は今でも心に残っています。日工教の企画・運営はきめ細かく行き届き，研究集団に付随する教育論ではなく，一教育者として機関を越えて一堂に会し議論することの重要性を感じた一時でした。

FDネットワーク　IDEセミナー報告

安　居　光　国

ＦＤが大学，大学院に義務化され，多くの大学はＦＤをどのように進めるかが悩みの種になっている。あるアンケートによると，多くの大学はＦＤ講演会を開くことでＦＤを実施していると文部科学省に報告をしているため，ＦＤ実施率は国立大学で100％の数字が上がっている。室蘭工業大学は年１回のＦＤ講演会はもちろんのこと，この「広報ＦＤだより」と洞爺湖ＦＤワークショップの３本柱で実質的なＦＤを行っている。とくにＦＤワークショップは合宿形式でありながら，義務と理解のおかげで全教員の半数以上が参加してきた。またＦＤと言っても，授業アンケート，授業参観，授業テクニック講座，授業カウンセリングなどまだ多くの要素がある。

しかし小規模大学のＦＤ活動は，兼任するＦＤ委員のもとで実施され，組織力，ＦＤ研究・開発に弱さがある。そこで，１つの大学等でＦＤの全てを行うのでなく，補完し合うことが必要となる。そこで平成21年８月20，21日のＩＤＥ（Institute for Development of Higher Education）大学セミナーでＦＤ・ＳＤネットワークの紹介があった。

京都大学を核にする関西地区ＦＤ連絡協議会のほかに，強力なネットワークがすでに，九州地域大学教育改善ＦＤ・ＳＤネットワーク：Ｑ－Links，四国地区大学教職員能力開発ネットワーク：ＳＰＯＤ，山陰地区ＦＤ連絡協議会，大学コンソーシアム京都，ＦＤ・ＳＤコンソーシアム名古屋，大学コンソーシアム石川，東日本地区大学間ＦＤネットワーク：つばさ，東北地域高等教育開発コンソーシアム，全国私立大学ＦＤ連携フォーラムなどがあり，とくに四国のＳＰＯＤはＦＤ,ＳＤ,ＴＤのプログラムを１つにまとめ34校8000名のスタッフに提供している。また東日本の「つばさ」は山形大学を核に，東北ばかりでなく関東，北海道の大学をも巻き込み，授業評価アンケートのサポートを特徴としている。

北海道では７国立大学，５公立大学，28私立大学，19短期大学，４高専の63もの組織の連携を目指し，2009年10月に北海道地区ＦＤ・ＳＤ推進協議会が設立された。これらのネットワークの狙いは，いずれもＦＤばかりでなくＳＤ，ＴＤの３つのDevelopmentの実質化にある。そのため，それぞれが持つプログラムの共有化，乗り入れのほか，ＦＤer（ファカルティ・デベロッパー）の養成を行う。

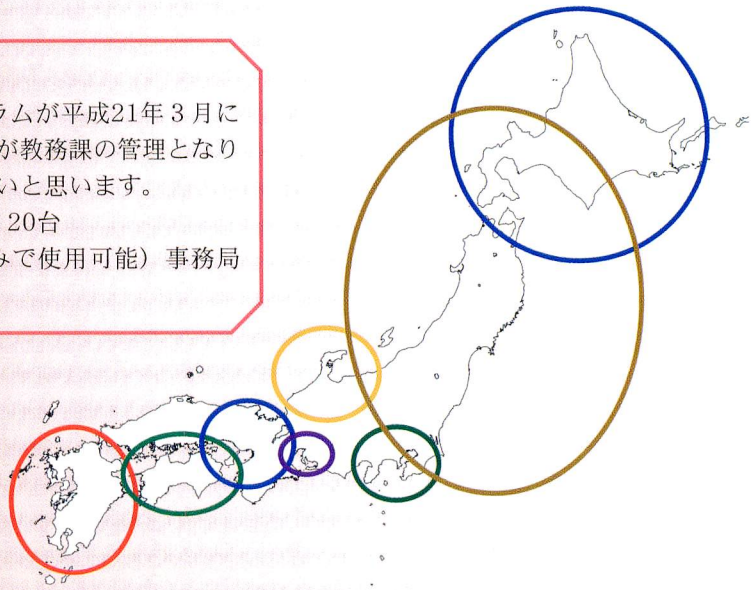
本学はすでに北海道大学のＦＤワークショップに毎年１，２名の派遣をしており，近くＳＤを共同実施する。それでは本学の今後のＦＤ活動は，北海道大学高等教育研究センターに委ねればよいのかというと，そうではない。ネットワークを利用するにはコネクターが必要であり，さらに学内ネットワークの整備も重要課題である。

教務課からお知らせ

平成18年に採択された特色ＧＰのプログラムが平成21年３月に終了しました。このため購入した備品の一部が教務課の管理となりましたので，他の科目でもご活用いただきたいと思います。

ノートパソコン（Vista, Office2007Pro）　20台

赤外線式会議システム（N101，N401のみで使用可能）事務局中会議室と同機種



編集後記

私自身もＦＤワークショップの受講生として大変勉強になりました。

また，皆さんが（嫌だ嫌だと言われながらも），目を輝かせ，まるで子供の様にとても生き生きと作業されているのが印象的でした．学生の本気を引き出すためには，やはり先生方が生き生きとされている姿を見せることがとても重要であると思われた二日間でした。

ＦＤ委員長